

第七百六拾壹號

區長
戶長

明治九年分清酒其外酒類釀造稅乘率ニ相用候酒價平均相場即チ明治九年十月ヨリ同十年六月ニ至ル左表之通確定候條區内各營業者へ爲心得無洩可相違此段相違候事

千葉縣令柴原和代理
千葉縣少書記官岩佐爲春

明治十年九月五日

千葉縣

二百六
見合

明治九年	安房國	上總國	相場下總國
品名	清酒	味	淋
酒價	五、三六四〇五	二、二八五八〇	二、二八五八〇
平均	四、九八六三二	二、	七、八七三二四
相場	四、七九五九五	流山一五、	七、六〇五七九
		外平均一〇、五四七五七	九、五二五
			七、三四九〇七
			九、三〇五五六

附言

表中ノ價格ハ都テ壹石ノ相場ヲ平均ス數字ハ金員ニシテ圓位ヲ示スニ(、)ヲ以テス但少數ハ絲位ニ止ム

第百六拾貳號

區長

學區取締

附屬小學校設置順序別冊之遊假定候條此段相違
候事

明治十年九月六日

千葉縣令柴原和代理

千葉縣少書記官岩佐為春

千葉縣

附屬小學設置順序

第一條

公立學校附屬小學ハ學費金額不足ニシテ特ニ一校ヲ設立維持スル能ハス且四近公立學校ヘノ距離半里以外又ハ以內ニシテ道路險難幼年生徒就學不便ナル地ニ於テ之ヲ設クルモノトス

第二條

附屬小學ハ該學區又ハ聯學區內ノ公立學校ニ屬スルヲ以テ教員給料其他諸雜費等本校ヨリ支給スヘシ尤附屬小學ヲ設クルニ於テハ該小學一ヶ

千葉縣

所ニ付本校資金ノ上更ニ五百圓ツ、附屬校一ヶ年大凡五拾圓ヲ増蓄スルモノトス

但本文ノ資金ヲ増加スル能ハザル場合ニ於テ

ハ別ニ其方法ヲ設ケシムルコトアルベシ

第三條

生徒受業料ハ本校ヘ收入スルモノトス

第四條

下等小學生徒ニ限り入學セシムルモノトス

第五條

生徒下等教科ヲ卒シバ轉シテ本校ニ入ラシムヘ

レ尤下等小學生徒タリトモ本人ノ望ミヲ以テ本校ニ入學スルハ妨ケナキモノトス

第六條

教員ハ本校ヨリ派遣スヘシ尤該學校區内ヨリ特ニ薦舉スルモ若シカラスト雖モ其名義等總テ本校ニ屬スルモノトス

第七條

經費ノ出納其他諸調物等ハ本校ニ併ハスルモノトス

第八條

生徒等級卒業ノ證ハ本校ヨリ附與スルモノトス

第九條

附屬小學ノ教授其宜ヲ得サル等ハ本校教員モ其責ヲ免ル能ハサレハ其訓導准訓導タルモノ恒ニ附屬小學ヲ監視スヘシ

右之通假定候事

明治十年九月

千葉縣

區長
學區取締

小學ハ素ヨリ幼稚ノ者ヲ教育スル爲メナレハ其
往反ノ便ヲ計リ普ク布置スヘキ筈ニテ既ニ人口
大約六百ヲ以テ一小學區トシ區毎ニ小學校一所
ヲ置ク云々學制ニモ攝ケラレ候ニ付明治六年以
降專ラ勸誘シテ到ル處公立小學ヲ興シ戸口稀疎
ノ地ニ至テハ一小學區内ニ二校ヲ設立スルヲ許
シ戸口稠密ノ地ト雖モ五小學區以上ヲ聯テ一

千葉縣

校ヲ設立スルヲ允サス風雨寒暑ニモ就學者往反
ノ支殆少ナカラサルヲ要シ一般其旨意ヲ體認指
据スルニ日アリ茲ニ管内八中學區千六百四十五
小學區ニシテ公立小學九百三十三校ヲ興シ山村
海市ト雖モ其設ケアラサルナク稍ヤ教育普及ノ
景象ヲ觀ルヲ得ルト雖モ施設ノ其法ヲ得サルカ
將タ人心ノ未タ學ニ嚮ハサルカ各校トモ維_持ノ
資金僅少ニシテ高等ノ教員ヲ聘シテ充分ノ教授
ヲ爲ストヲ得ス若シ之ヲ增募シ學資ヲ饒ナラシ
メントスルモ地租改正ヲ始メトシテ百般ノ事業

創草ノ際公費費ラレス民力負擔ニ堪ヘサルモノ
アリ學校保護ノ法多クハ苟且ニシテ未タ以テ不
朽ノ基本立チタリト云フヘカラス今ニシテ之ヲ
矯正セスンハ有名無實萎靡救フヘカラサルノ弊
ヲ馴致スルハ必然ノ事ニ付更ニ施設ノ方向ヲ一
轉シ當分ノ内聯區學校ヲ分チテ二校或ハ三校ト
ナスヲ止メ一區特立ノ學校モ資金寡少ニシテ之
ヲ維持スルニ足ラスト認ムルトキハ姑ク二校或
ハ三校ヲ併セテ一校トナシ二三校ヲ維持スヘキ
資金ヲ以テ一校ヲ保護シ幼稚ノ者往反不便ノ地

ハ附屬小學ヲ設置シテ整然公立小學ノ體面ヲ具
シ其教育ノ實効ヲ收ムルヲ要シ候條右ノ見込ヲ
以テ公立小學合併ノ方法取調可申出候資金缺乏
ノ校ノ如キニ至テハ縣廳ヨリ其合併ヲ命令スル
義モ可有之候尤モ民力餘裕アリ學資豊足ノ日ニ
至テハ再ヒ校數ヲ増シ終ニ一小學區毎ニ小學校
一所ヲ置キ學制ノ條則實行候様可致候公立小學
合併附屬小學設置順序ハ別ニ可相違候條兼テ
學區内人民ヘモ篤ク可申論候此段相違候事

明治十年九月六日

千葉縣令柴原和代理
千葉縣少書記官岩佐爲春

三
千葉縣

乙第百六拾四號

區長
學區取締

公立小學合併手續別冊之通候條此段相違候事

明治十年九月六日

千葉縣令柴原和代理
千葉縣少書記官岩佐爲春

公立小學合併手續

第一條

公立小學校ヲ合併スルモノハ其資金ノ俱ニ僅少ニシテ之ヲ保持シ難キニ因由スレハ第一ニ資金ノ多少ヲ論セサルヘカラス

第二條

資金ニ多少アリト雖モ其學校ノ位置ニヨリ就學ノ支障ヲ致セハ第二ニ位置ノ如何ヲ察セサルヘカラス

第三條

就學ノ支障ナキ地ニシテ資金亦充足セサルモ今ノ學校ハ概テ稱小或ハ假設ニシテ衆多ノ生徒ヲ容ルヽニ便ナラザレハ第三ニ生徒ノ多寡ヲ問ハサルヘカラス

第四條

此三ノモノヲ商榷シテ其合併ノ標準ヲ定ムルコト下條ノ如シ

第五條

學資トシテ有志者ノ密附集積及ヒ其他ノ方法ニヨリ儲蓄シテ其校保持ノ費財トスルモノ即時納

付又ハ五ヶ年以内ノ年賦日掛等ヲ間ハス金貳千五百圓ニ滿タサル學校ハ二校若シクハ三校ヲ併セテ一校トナスヘシ

第六條

學資寄附及ヒ集積等ノ名アリト雖モ之ヲ實行セズシテ學資金利子收入法ノ如クナラサル學校ハ之ヲ他ノ學校ニ併スヘシ

第七條

寄附集積等ノ資金第五條ニ示ストコロノ員額ニ滿タサルモ年々學校所有ノ田園山林ヨリ生スル

三

純益金及ヒ月々收入スル生徒受業料等ヲ學資金利子ニ合セテ到底金貳千五百圓ヨリ生スヘキ利子ニ相當スル學校ハ合併ノ限リニアラス資金ヲ預ケ又ハ貸付ノ利子ハ金拾圓ニ付壹ヶ年金壹圓ナルヲ法トス

第八條

市街其他家屋密着スル地ハ直轄ヒ學資金貳千五百圓ニ上ルト雖モ一市街一村落ニ二校若シクハ三校設立セルモノハ之ヲ併セテ一校トナスヘシ

第九條

一市街一村落ニアラスト雖モ甲乙兩校ヲ併セテ
其聯合小學區ノ極端ヨリ存置學校ヘノ距離半里
以內ナルトキハ一市街一村落ニ二三校設置セル
モノニ準レ甲乙兩校ヲ併セテ一校トナスヘシ
第十條

山區海濱等地勢延袤又ハ斗絶シテ就學ニ不便ナ
ル學區ト雖モ學資金貳千五百圓ニ滿タサル學校
ハ二校若シクハ三校ノ內其一校ヲ存シ餘ハ附屬
小學校トナスヘシ
第十條

四

第五條第八條第九條第十條ニ相當セルモ二校若
シクハ三校ヲ併セテ其生徒貳百名ニ出ルモノハ
之ヲ併スヘカラス然リト雖モ第六條ノ學費寄附
集積等ノ名アリテ實行セサルモノハ直饒ヒ生徒
幾百名ノ多キニ至ルモ他ノ學校ニ併セサルヘカ
ラス

第十二條

生徒員數ノ多キヲ以テ學校ヲ併セサルコトアル第
十一條ノ如シト雖モ甲乙丙ノ三校ニシテ甲ハ生
徒百五拾名乙丙ハ生徒各三拾名若シクハ四拾名

ナルカ如キハ直轄ヒ之ヲ合セテ職員貳百名ニ出
ルモ之ヲ併スルヲ要スヘシ

第十三條

其學校ヲ合併セントスルニ方テハ先ツ位置ノ如
何ヲ相シ合併スヘキニ校若シクハ三校ノ中ニ就
テ孰レノ校ヲ存スレハ就學最モ便ナルカヲ考定
シ然ル後他ノ一校若シクハ二校ヲ以テ之ニ合併
スヘシ

第十四條

位置ノ便否ニ於テハ俱ニ一得一失アリテ其遲庭

五

大ナラサルトキハ其學資金ノ少ナキモノヲ以テ
多キモノニ併スヘシ學資金貳千五百圓未滿ノ學
校ヲ以テ學資金貳千五百圓以上ナル學校ニ併ス
ルカ如キハ素ヨリ其位置ヲ擇ムニ暇アラサルヘ
シ

第十五條

位置ノ便否資金ノ多少共ニ相伯伸シテ之ヲ判決
スヘカラサルトキハ生徒ノ寡キモノヲ以テ多キ
モノニ併スヘシ

第十六條

生徒ノ員數モ亦大ナル差異ナキトキハ校廬ノ大小
小半隨教場ノ便不便潔淨汚穢トニヨリ之ヲ判シ
小ナルモノ隨キモノヲ以テ大若シクハ半キモノ
ニ併セ不便ナルモノ汚穢ナルモノヲ以テ便且潔
潔ナルモノニ併スヘシ

第十七條

第十三條第十四條第十五條第十六條ニ所ストコ
ロハ區内人民ノ商議ヲ採リ戶長學區取締之ヲ定
ムヘシト雖モ甲乙兩學區ノ議協ハサルトキハ縣
廳ノ命令ヲ以テ之ヲ判定スルコトアルヘシ是公立

六

學校ハ其存廢獨リ人民ノ意圖ノミニ任セテ己ム
ヘキモノニアラサレハナリ

第十八條

學校ノ合併ハ其學資金ヲ密附及ヒ集積セシ有志
者ノ内三名以上學區内町村總代人學校事務掛正
副戶長學區取締連署具狀シテ縣廳ノ允可ヲ得ヘ
キモノトス

第十九條

學校ヲ合併スルトキハ該校ノ資金及ヒ書器教員
生徒ヲ舉テ之ヲ合併スルモノトス其教員タルモ

ノハ縣廳ニ於テ合併ノ允可ヲ與ヘン後更ニ某校
ニ在勤スヘキ旨ヲ傳フヘレ

第二十條

合併ニ相當セル學校ハ明治十年十一月三十日ヲ
限リトシテ合併ノコトヲ縣廳ニ具狀スヘレ
右ノ通相定候事

明治十年九月

千葉縣

乙第貳百六拾五號

區長
戶長

酒類釀造及請賣營業免許鑑札成規ノ通り來十月
檢査候條同月以降來十一年九月迄引續キ營業致
度者ハ昨九年九月縣廳乙第貳百三拾號達維形書式
ノ通り願書相認^メ酒造營業ノモ^ノハ該一期^各
自鑑札相添へ可願出様區内營業者へ無洩可相達
此段相達候事

但廢業ノ者ハ其節鑑札返納可爲致事

千葉縣

明治十年九月八日

千葉縣令柴原和代理

千葉縣少書記官岩佐爲春

區長

醫務取締

虎列刺病豫防法心得其筋ヨリ被相送候趣モ有之
右病症流行之際ニ當テハ尙可相送義モ可有之候
得共差向キ消毒藥及消毒方法其他左之通相心得
兼テ區内醫師並ニ一般人民ヘモ可申示候此段相
達候事

明治十年九月十日

千葉縣合葉原和代理
千葉縣少書記官岩佐爲春

千葉縣

明治十年九月十日
百五十五
第百五十五號

- 一區戸長醫務取締ハ區内ニ虎列刺病者アルヲ醫師其他ヨリ届ケ出タルキハ其真偽ト緩劇等詳細取調該大區出張所並ニ縣廳ヘ即時申報スヘシ
- 一醫師ハ虎列刺病者ヲ診察スルキハ其時々直ニ區戸長醫務取締ノ内其近接ナル向ヘ時間ヲ移サス速ニ届出シムヘシ
- 一學校旅店滯泊處等總テ衆人ヲ管スルモノハ若シ其内ニ虎列刺病ニ罹ルモノアルキハ前條同様届出シムヘシ
- 一虎列刺病者アル家族ハ看護ニ緊要ナル人ノ外ハ

成丈ク他家ニ避ケシメ妾ニ往來セシメス患者恢
復或ハ死亡ノ後消毒法ヲ行ヒ十日ヲ經ルニ非サ
レハ交通セシムヘカラス

一區戶長醫務取締ハ虎列刺病者アル家屋敷備ノ門
戶入口ニ書シク虎列刺傳染病アリト紙或ハ板ニ
大書シテ之ヲ貼付セシメ無用ノ人ノ交通ヲ停メ
シムヘシ

一區戶長醫務取締ハ虎列刺病者ノ吐瀉物ニ注意シ
該病者アル家ハ一々其處置ヲ示諭シ決シテ便所
下水芥溜田圃河海ニ投棄セシムヘカラス消毒法
參看

シスヘ

一虎列刺病流行ノキ或ハ其恐レアルキハ區戶長醫
務取締ハ便所芥溜下水溝渠等纏テ一般ノ清潔ニ
關スル事件ニ注意スヘシ但掃除ハ既ニ流行ノ時
ニ及テハ或ハ行フテ却テ害アルコトアリ消毒法
ヲ行フヘシ全上

一虎列刺病者ヲ運搬シ或ハ該病ニ罹リテ後他行シ
或ハ患者若シクハ屍體ニ觸レタル物品ヲ消毒法
ヲ行ハサル前贈與受用スル等ヲ停メシムヘシ

一虎列刺病者ヲ運搬轉移スル器物ハ消毒法ヲ行フ

後ニ非サレハ之ヲ他ニ使用セシムヘカフス

消毒藥及ヒ其方法

虎列刺病ノ真因ト其蔓延ノ實況トハ未ダ明了ナ
ラスト雖モ其病毒ノ特ニ患者ノ吐瀉物ニ舍トレ
ルコトハ諸説ノ一定シテ復タ疑ヲ容レサル所ナ
リ
而シテ此吐瀉物モ排泄ノ後直チニ傳染ノ毒ヲ逞フ
スルモノニ非サルニ似タリ少時ヲ經テ泡膿腐敗
ニ陥リ然ル後始テ一種ノ傳染毒ヲ醸成スルモノ
ナリ故ニ吐瀉物ヲ他ノ腐敗シタル物ニ混スルヤ

三 千葉縣

ハ其腐敗スルコト太ク速カニ病毒ヲ發生スル
コト最甚シ虎列刺病者ノ吐瀉物ヲ他人ノ糞尿ニ
混スル尋常ノ便所萃溜下水ハ大ニ其蔓延ノ勢
ヲ熾ニスルモノナリ

右ノ如クノ發生シタル病毒ノ人體ニ侵入スルハ
飲水虎列刺病者ノ汚物ヲ理メタル近傍ノ食物
ハ該排泄物ヲ排泄物ヲ食ヒタル魚介家畜ノ肉或
中ニアリテ之ニ染ミ或ハ小蟲等汚物ヲ或ハ消毒
法ヲ行ハサル便所ニ上ル等ナリ而シテ人體器具モ
亦能ク病毒ヲ傳播スルノ媒介トナルモノナリ

消毒藥中最有力ノモノハ石炭酸ヲ第一トス近來
消毒法ノ聲譽ヲ得タルハ職トシテ此發明ニ由ルナ
リ之ニ次クモノハ亞硫酸瓦私ナリ綠礬ノ單用ハ
防臭ノ能アルノミ病毒ヲ撲滅スルニ足ラズ亦タ
石炭酸ヲ配用スヘシ

(消毒藥方)

(第一)粗製石炭酸

四十五分ヨリ六十分ノフエニル酸即チ結晶
石炭酸
含ムモノニシテ粉色ヲ帶ヒ流動シテ水ニ溶化シ
カタシ「テール」ヲ和スレハ不快ノ臭氣ヲ發ス

四 千葉縣

(第二)石炭酸末

右ノ粗製石炭酸ニ木炭。砂。灰。鋸屑等ノ粗末ヲ稱
シタルモノ

(第三)結晶石炭酸即チ「フエニル酸」又「フ
エニルアルコール」

無色ノ結晶酸ニシテ全ク水ニ溶解スルモノ八十
分至廿分ノ水ニ
テ既ニ溶解ス

(第四)石炭酸水

結晶石炭酸一分ヲ百倍ノ水ニ溶シタルモノ

(第五)石炭酸溶液

結晶石炭酸二分ヲ百分ノ水ニ和シタルモノ

(第六) 硫酸銹ト石炭酸トノ混和溶液

一「キロ」我カ二百六拾ノ綠礬ヲ十五「リトル」我カ

五余ノ水ニ混シ三百「ガラム」我カ八拾至三百五

十「ガラム」ノ粗製石炭酸ヲ加ヘタルモノ

此合劑ハ久シク貯フヘキ

(第七) 石炭酸蒸氣ハ用ニ從テ粗製或

石炭酸ヲ皿ニ盛リ文火ニ上セ蒸散セシム

(第八) 亞硫酸瓦私

硫黃ニ火ヲ點シ燒テ瓦私ヲ發ス

(消毒藥用法)

五 千葉縣

消毒法ヲ施行スルニハ(第一)其瀉物吐物及ヒ此吐瀉物ヲ以テ汚シタル衣服夜具紙屑布片等及ヒ其屍體(第二)患者ノ消息シタル居室臥室若クハ病院陣營等(第三)便所塵芥下水等一切不潔ノ淨除ニ注意スヘシ

(第一) 病毒ニ汚染シタル物品

(排泄物) 吐瀉物ヲ受ル器ハ廉メ綠礬ニ石炭酸ヲ混

シタルモノ (第六) 一合餘ヲ入レ置キ用ヲ終ルノ

後ハ直チニ屋外ニ持出シ洗淨シテ又右ノ消毒

藥ヲ入レ後用ニ備フヘシ